

(写真： UNHCR/Kaoru Nemoto)

早いもので、ネパールのダマクに駐在し始めてから5ヵ月が経ちました。亜熱帯の平野部にあるダマクでは、暑さが容赦なく襲い掛かります。難民キャンプに2-3時間いると、蒸し暑い日には情けないことに脱水症状を起こしてダウンすることも。つくづくオフィスワークと冷房に身体が甘やかされていることを痛感します。難民たちは風の通らない密集したキャンプでの生活から逃れることができないわけで、車に飛び乗って冷風にあたるたびに申し訳なく感じてしまいます。

しかし、容赦なく照りつける太陽はエネルギー源でもあり、キャンプでは太陽光パネルでできた調理器「ソーラー・クッカー」が活躍しています。「Vajra Foundation」というNGOが音頭をとって一つのキャンプで試験的に導入しました。4-50分で家族6人分の食事が調理できます。普段はこのお椀型のパネルを下に向けているのですが、午前中陽が強く差してくると、一斉に皆「お椀」を上に向け、どこかの惑星にいるかのような不思議な光景がくりひろげられます。今年から他のキャンプにも拡大することになり、説明会が各キャンプで行われました。難民たちは興味津々で、普段は保守的なお年寄りたちからも、「早く使ってみたい」との声が聞かれました。関係者にはソーラー・クッカーで調理された食事が振舞われました。何だか太陽の恵みがこもった、ぬくもりのある味のように感じました。



環境に優しいソーラークッカー



真ん中にあるのがお鍋



「世界難民の日」のイベントの様子



「我々はもう難民なんかでいたくない。難民もまた人間なのだから！」

6月20日は世界難民の日。ネパールのブータン難民キャンプでは、各キャンプで青少年の代表らが中心になって、寸劇や歌、踊りなどの催し物を企画。今年の新機軸は受け入れ側コミュニティーの参画です。キャンプ周辺の地元の学校の先生や生徒たちが式典に参加して、スピーチや踊りを通じて難民たちを激励しました。今年の世界難民の日のテーマは「HOPE (希望)」。「We do not want to be refugees anymore. Refugees are also human being」というプラカードを、ブータンを逃れてから15年経った今も問題の解決を見出せず、未だ難民であり続けているブータン難民たちが掲げているのを見るのは、何とも心苦しいものです。

しかし、この日の午後各キャンプで行われたサッカー・トーナメントの決勝戦は、そんな息苦しさを吹き飛ばしてくれました。UNHCRの「HOPE」Tシャツを着て女子の部、男子の部に分かれて行われた決勝戦は、娯楽の少ない難民たちにとっては格好のイベント。文字通り老若男女が歓声を上げて見守る中、優勝の座を賭けて戦いました。必ずしもサイズが合っているとは言えないながらも男子選手たちが何とか靴を調達してきたのに対して、女子は全員裸足。裸足のまま激しくぶつかり合い、シュートを決めるのですから、痛いには違いないのですが、皆何ともすがすがしく生き生きとプレーしているのは神々しく見える程です。優勝したチームの女子選手たちは痛さを忘れてはしゃいでいましたが、彼女たちの足は切り傷を負っていました。それでも、「靴があったらもっと上手にプレーできるのに」と痛みのことなどそっちのけです。



サッカーは難民キャンプでも人気のスポーツ



たくましい難民の女性たち



切り傷が痛々しい・・・

難民問題の解決の糸口が見出せない中、ブータン難民はネパールでは就労権が与えられておらず、若者たちは将来の青図を描けずにいます。スポーツや演劇・音楽などの文化活動、職業訓練などをこうした若者たちに提供することは、フラストレーション解消や精神安定、ひいては自立支援の機会を提供することにつながります。UNHCRではこの7月からいくつかのキャンプに「Youth Friendly Centers」を設け、若者たちを対象にした活動を強化する計画です。また折を見てネパールから活動状況をご連絡します。

2006年7月3日

UNHCRネパール・ダマク事務所長
根本かおる